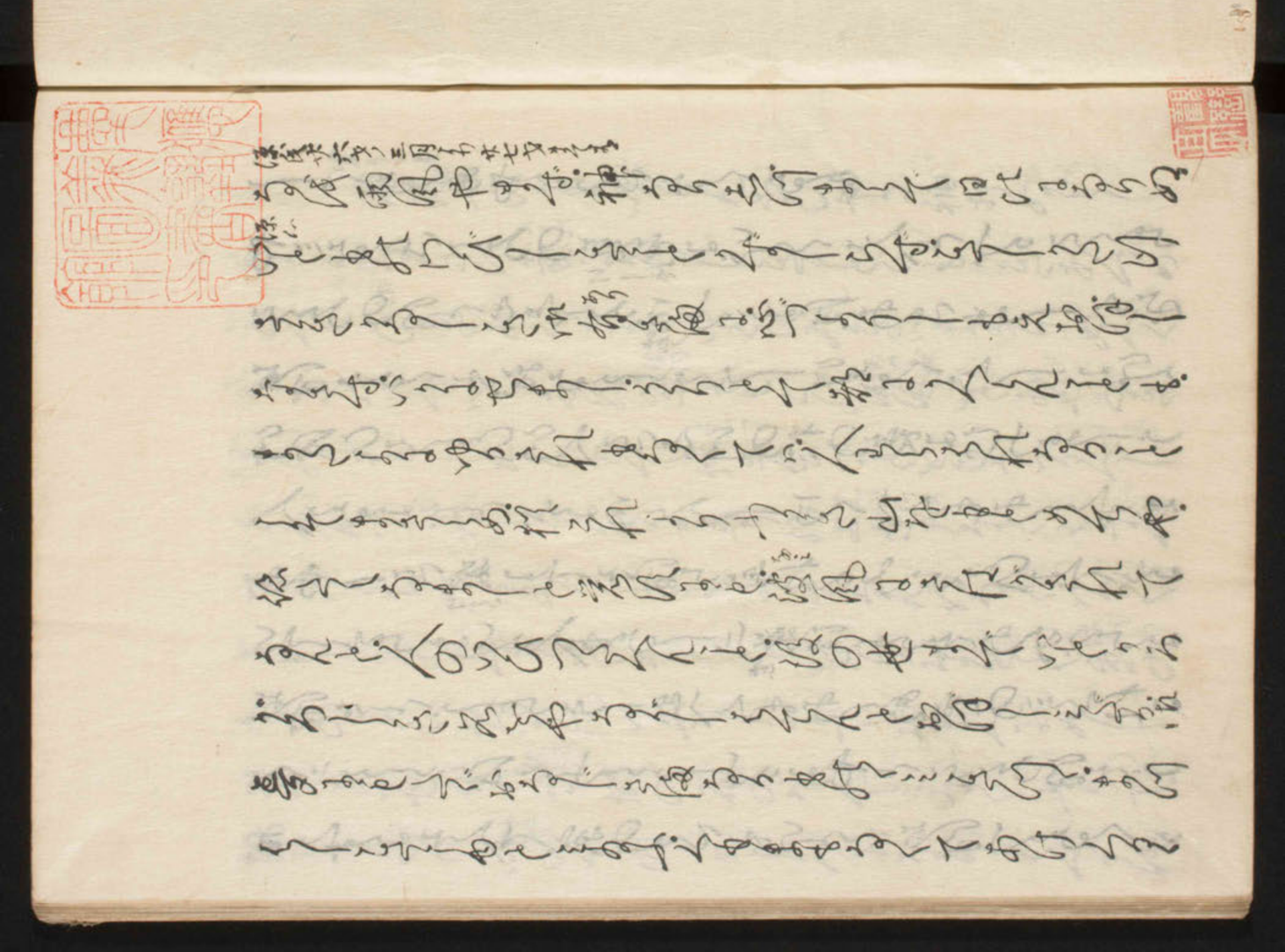
57X
27
60

あ

千歌と詞を名ときわ



日ごろ経て京のうちまいりてぐあるべくも
くちぐちぐちぐちぐちしてるやとところぼそう
なげきぐらしさて出べくもあるものこぶれは
いでたちまいりへまるし二条院ちぐおかぐらる
あやしき楽ましてそはちあれるみちちひまてぐる
人うるまぐしぐるはちんぐつくべくもあらずま
げはひちちひけべきたげのれの衣ぬむつまう
なげきちくも紙ちぐちうてけるくちくまけ
ちちのはぐぐちちはやちまはあきまくを
やちるきちちの色ぬいぐさへとづちち
しくちぐあやるうきたくるん

瀧風やいうる吹ちんちひやる袖打めく
うきまちちれ衰ようるちくもちきあつめ
ぬりひきあちりいちぐみぐはまちりめべく
うきちちなぬちち京まもちれ雨風いぐあやちき
あちきちちなりてに王会ちぐをちるうべく
ちるん笑ぬうちちるより治正遊アたくもすへ
てたちちぐてまちうぐまてるん結ちぐうぐく
しうもあちくちるうかちうたをぐ京の
うちのちくなげをぐいぐおううておまへるめ
出てとうをもおぐ例のあのをやちたくありて
風いちちぐいぐいでりくはぐちるちちべる

御ものあるとおどろきあるいはくちのそこ
なるごとくのひかりいうづちのこゑまもなく
ゆくごとくなりいきどころをしらず
てをるかのいとくしきまも心ぼそき海うりける
くしつくしたつきあべきやとおぼえくくし
をなの日の曉より風いとづよう吹出ようにて
波の音あらきこといはるもあるまじきもの
なりこのあるひのくさ海さまいとうるさく
てかちくはあとおぼゆるおろかさ人
なり我はいかるつきをあつてくくなるさ
ふくるまんちく仏ものあひだうるさめこの

なをまうでたあべきことくなげく悲しきをを
ものめておるなげくのあやまちてこれるざさる
命をばこたへんとうつうばしかをどいとはた
ゞこれが家のこてくさけをみてすこし
のうちきさひをたのめ海まり給海とまけ
をこれまふ神なるばこすけうまんとおぼく乃
大敷をこて給をのくこげうの命をたうる和
こてうこれ男のまるさ例ようげこの如
べきこのいとどうるこうるをこて
すこし地獄やり限りなをくてこれ男ひとつを
すこひをんとこるこまこるはとけ神を

念じ奉るといひつのりつるやうにて
まひて多くの神しるしをぞ給はりぬ。
されば此やしまのまつくぼ
のうらとぞ云ける。今の世の
ひとびとこの海の波風よい
なる神社
給へ天地とともにうゐ
つきてくてつきあるべ
き。家をたもれ。ゑびをとりて
用れやすきことなり。みなくるしき
めぐみ給へ。命つきんとすれば前の世のむくひ
此世のとがとて神はとけあきらめまし
給へとぞやしろのうら

しきて海ぐの龍をとて又海の中の龍王よ
りの神さらに龍をいとくるりとぐろ
をまきおりて海のかもしあらてらいやけめでたしあ
るべきおろかなる大魚蛟と
なりてとこしなへに立こそ
いとらうぐるくなりぬ。
かとなる。元い云をすりうるやうまて日もくれ
ぬ。

やうく風うをさり雨のあしもうちはしのひゝ
もゝゆるをとあるもの有のいとめげゝうをするも
いとゝうをけるくてゝとんてんこうへゝうのゝはなんと
するをやけあり うをるもようとまつげるそうをの
人のをとゝぐうゝまうをくるをようをみなどもをみな
うゝてゝをうをあををあゝてゝをゝをとゝをゝをゝをゝ
あくるをこゝいけるのんずずをそなばゝめゝをうをする
いとゝ心あをゝをゝゝ月をうゝてゝ泊のうゝくゝをうち
けう泊をあうをるをうゝ枝をうくる泊あうゝをを
妹の戸をゝいけて流めからゝまうをゝをせかいくを
をものゝをうをとをうゝをゝをゆくゝ泊のをうち

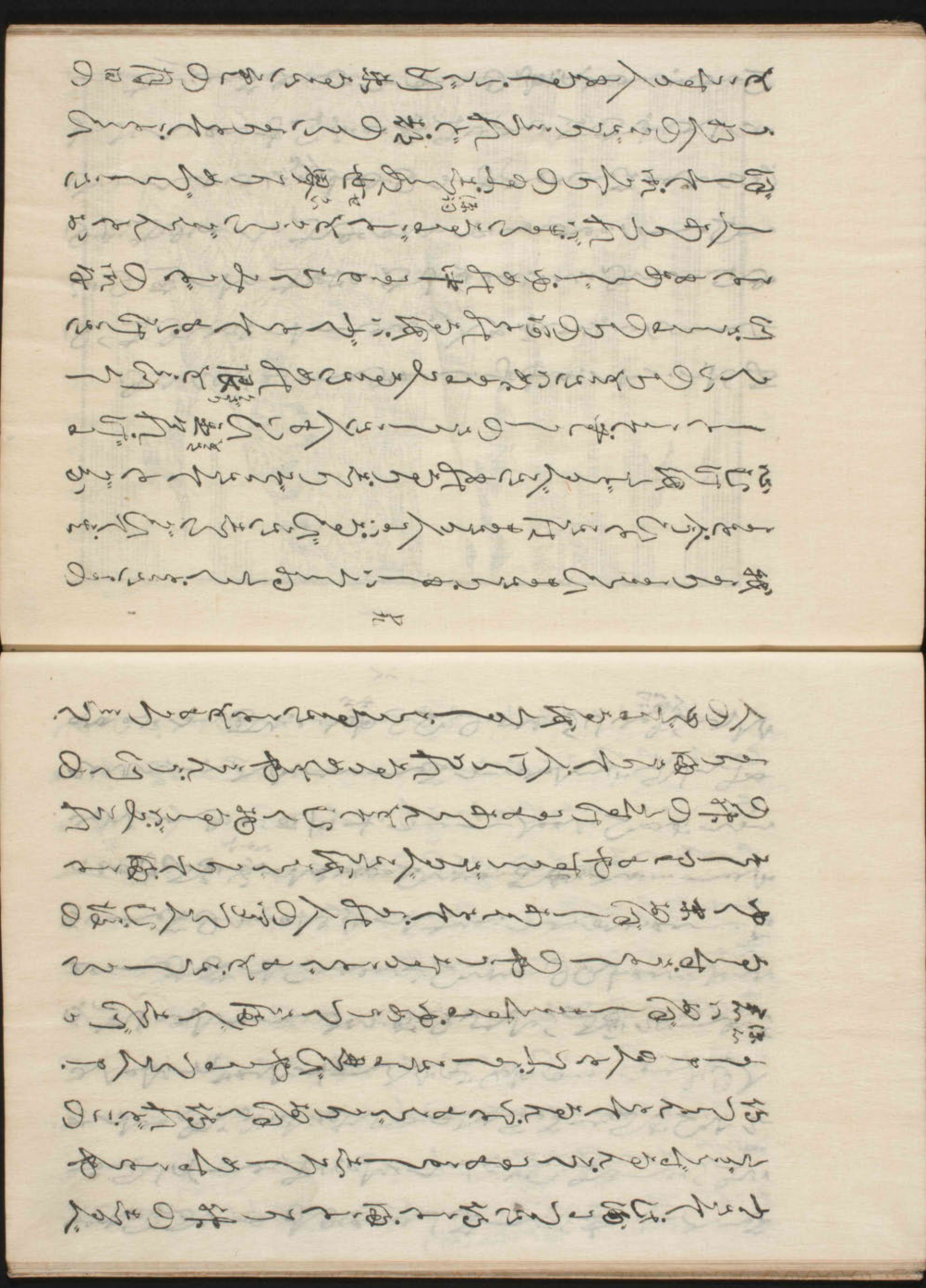
[illegible]

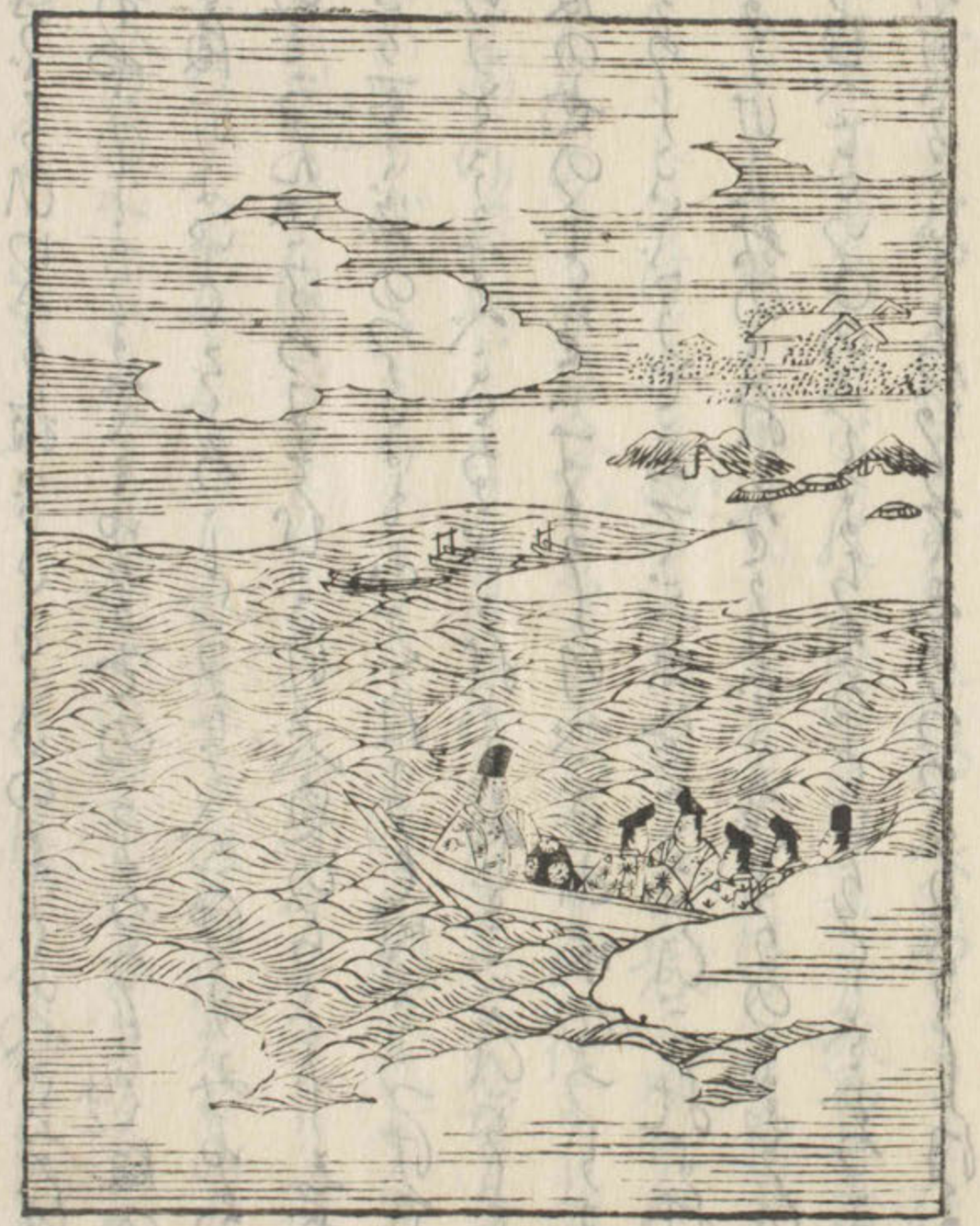
をのげくるまあり それぞのつをあつる 終 程
いさまるくてはよろこうてはしりつれどいとさ
うれへふづむをうるるへるそうそうよう
るぎさるのぼりいくこうじまれどくれ
つあでるぎうる夢すべきしあるまうるん
いそぎのぼりあるとて立うあぼるしく
てれとまるまうるんとくるさいうるそこなげのえ
れぶへまるくて月のこのこくくうして
夢の心ちもまぶれけるひとまれる心ちして
雲衰ふしれびうぎうしばやめれうちまもまら
で逝うあばつるるきれる海をはのうたれお

きさ　ふまりつのこ面げるばしまて就く
るるうこ成こるあいのちつきんうしの成
しこるけるけるあるとあれるあばするく
でるるこるこもけるとあばこれまこうれ
こあばるる恨るしばれつよるぎるて中こる
心ふどひこぞうつのるうこるこもみはれて
やめるれいへをいますうこるこ成ぎるめる
こくいぶきるえやこ結ここるるれいるこ
のへいぎうこれめこあるこて覚ぎるる成るこ
るぎこるちいこやるるこあるこるて人二三へぎうば
こびのれやぎうをこうてくるるべるんこるへべ

ある
的石の海うちさ紀の（播磨前司入道）のぞきたぶらのぞみ見ひてて
馬にのりて源お納（実隆）云さふてひさまつぐ対面（たいめん）して
こと共心ちりやさんといふてきよおどろきて
入道さ共さのとくいて幸びあひてひ
ぬつれどうさくまいさくあひうちひろく
ぬてごとうきうそ紀ぶうそ共さでひさう
ちりぬめうそ紀ぶうこのまうぶれいそうこと
めうんとぬぶめく（源）えのれ夢ちすぶをもおぶし
めしすうこともありて（汨）やあんとのうまんで（良）毎コ
ぬうてあひうちさぶうりいぶうりけう浪ぶる
いうるコうあるでいうちうんとうろうえぶうを

ちうりいめうついうちのひの夢（ゆめ）ぶ海うくなる
めうつぶちうすうこと作ちうぶうんぶうぐうさ
うぬるひうまんしうく十三日（ふつか）あううる
うううんう毎紀うそひうそ必（ふぶ）西やまで
ひううまうをうきわてぶめうくの作ちうぶ
うろうるうのうそひをまうけて作作ちる
いうちき西いぶうちのおどろうちぶりつれぶ
人のみぶうを夢ひをうんぶてぶうをうそうる
さぶひあうひ作けうをまうねる世作うあまでも
ぶいうまめれひをすぶうぶうとつぶ
作うんとて毎いぶ作作うるあやうぶ紀はそう





ひろうぢろを高のとも色とうるどあ仕ようれし
さうろぶわ代るんうけ海よ志げやうくろふ
べさらまゆりるんやとのあ子鈴ぶろうちくうろ
しびうこもりりとそともあれうくまあれ毒の
あけうてあさうるよれあねよれとて例の志
うこさうぶろ宮め人ぶろうしてゆうめれいの
はそでさうてどぶやうるあうこはつさうあめ

しづくひかりかがやくさまのおもしろさ
あやしくらうまでこゆるぞのうろこ
屋(ほん)げよいとくろくしとるり八(はち)げうみゆる
のこるんれこうろよそむこさけ八(はち)道のらうしこあ
ろう丁ぐ海のつくよも山ぐれるもはくこつけて
けうをさうすべさるぐさされとやをこるひとて
枝のせのくをしすまけべさ山水のつる
いあくこさぶうをと立てこ味をこるひこれれ
まうけよ秋のこれこをうおこあのうのこれ
けむべくさいひのくうまちぐるどおりくころる
川けうこぐころかりてこあつめくうこうこはる

おりてこれぐろむをめちどいとくべのやどるこうけ
してすまをくればこれれ屋のこちころやすく
なりまよ舟よりれ車よりこうほど目やよ
くこうのぼりて川(はくは)のくこえまりより竜(おい)もつれ
こくひのぐろ心ちこて立こうえてまけ住この
神をくりぐおりこなろ月日の光をるこえなり
ころ心ちこていくちこうこうまける変(こと)どこり
こり前(ほん)のこ屋をぐさくこもいくぐけこちこる
こうこへ求立(こぐう)こていく前栽(ぜんざい)ぐの有様えもいも
ぬ八江の水をどこ立こうこ月心のいこうすくこるこん
ここいくさまこぐまぐこる月ぐころのれまこ

ぬるりふしまるくあさましうしれさう
らひなどえるまずしてすまるけうさ海るどげる
殺のやんごとなきさまるくまとるまずえんる
まばゆきさ海いまうりざ海までゆうすうしれ心
そげまりていまのれやうどどさて絵まれりし
つひいうはいうぐさうらるむうてるまさ
ゆ代みうとるさまそげうてあれすまるとうりる
をめしてうるあまれうもれどどもあく絵てつい
すむつまうしされいのりのしどどうるべさまるよい
は証のれ有絵くくしくらひつもすべしべ花の安
どうよいめづうまてあまうさ海などさて

絵二条院のあくれ必しほれれういうさまや
つを絵まずうちをさくなしのびひつさまて絵
れ氣色る代さまるり絵すくいうぐさめれ恨を
まいうまてつなりさ海るれぶいまるとら代さひ
まるまくい心のさ海まり絵れどうぐ代えてもわく
ののひしい面げのまるまるまるさうく海ほう
まるくぐやとうまうさ海ぐのれりし
代さうしとられて
まるくまるもあまひやるれまくざりしうう
まりまうよ海づまひしして夢の中まる心うのま
まてさあまてあはどいうよひぐとは海うんとそ

こゝろくるくるこゝろぐるひの人多しまぞいとゝ海
ぬしさそじめるる海ぶとゝされ心ざしの狂
と人どゝてまつるきのく喜よ心ぼそげなる
ことつてとべあるまやこゝろしこゝれ気久
久おるくすこつゝてあらうするなどもほこう
ちげるう浦まけとゝ心ぼそうてなまれいとやも
まれるうしと人しげさらひハ志給しうど
うゝと久海ゝとる表ゝ海ゝとおほうてようげ
ぼしるぐさるるおうゝ代道どこるひけどあうう
海ぶうどうどする母しるぼうでゝ代姫ひうを
まてロづひうゝうこゝらうゝうゝさもので

ゝきくまうゝれ人男ゆ成心ちまおゝとと
ゝゝゝゝ結し人るれぐくぼくて光ゝり
おりしるもうべき契あるまやとぼしるぐう
るゝうゝ成ちげめるほどこるひうり和の
ゝとふぶり結の人もうぶるうゝいひしま
さぶとぼげんも心ゝづうぼうれぶ表
久ぐう結ゝくるゝまるまれてゝうぐき有極
るべるるぶもきけるれとゆううぼれぬ
まもあしぶ人ゝうゝ成ゝうこまりてまけうも
おさくまいぶまれへぐゝゝとうしまのやり
ゝうる海ゝういけきれゝ生ゝるぼゝうあるも思

笑ていぞ。なほ心をうてんとはとけ神を
いのくもんでしてもまつ。年は六十ばかりなり
ありふれどいとをさなきまはさうをさるひ
ゑびひて人の目どのあてをうるれぬやあんん
ちひがことはをぐちをさといあれどいとへの
ことをもうつてきはずうづさうろ
ことをもうつてきはずうづさうろ
すてつれぐのまざれありぐしごろはやけ
ひとつれいと海ちくてさしまちくあのあれ
ちくまくでいでくさもうろ而をを人を
いとをぐうまりけさうぐさくやとまでけう

ありとあはをくをもちぐかうくをもれをを
れどいとけうう心をづくされ有ほさくそ
いひしぐけくまりうちなりてけうやふいろろの
ほくまをえうち出ぬしめと心もとうう口ありと
をくまをいひあけをてうげくをうぐをむを
をべての人ぐをやすをいをあ世界ほまを
ろう人もおりをりをくをなりしまつけて月乃
往をれていををうをで心笑けうおやをらの
くをひあつををうくまをまげうををくをなを
つをぐをうりいを拙表をり月はなりを
人のれをうぐくを性のをひうをぐをあう

ケラつくるを後ケラハいづれも伝ちんなるまで
延喜のれてうひきつくへうとこ代よりゑん
ゐり伝のゆるゑゆうつるるき身まてこれとい
ゑ枝ワもれ伝のゆるゑゆまちきるいづきさおりく
うきるうしく伝のゆるゑあやしうるのゆまよりく伝
うそゆんよれちむワうのれるうひて伝れ
山ザーのひゆくよ伝ゆをきつワうくるま
やおうんいうでこれこのびてきうきせて
ゆうよくアゆうまうようちワるうさてうきゆおる
へうりゑ（ほん）こうゆこうくゆきうくゆけう
あうるうきうつきうれうてをしやアとうまゆ

（清河）あやしうせうきうきうハあるんひきとう地ちう
けうゆうのれつくんよてゆゆきうゆうまなよれ
ゑきまれしゆけうゆれすぐまてうきうて
けうきうくんうすべてしまうるゆゆうゆ
くへうきうるでのゆやアとうるのこあうをうくる
ううのきうめまうけうまけうゆうれ
いうでうはきくへきとのゆきうめんうるゆの
うくううしゆうんおまくへよめしてもおきくへの
中まてうるうようきうやきくへいゆれ
びくるん後うとのゆゆひのきうびもうくへいうくへる
ううゆしをおきくうゆうるうるうゆ

しさてなどすぎしるるんいでさぐるまを
べんあらさなすれたるまで取だるまうも
ぐらへくれちぐぐさつひろまれたげうしさ海
ぐるくあるくもゆるなすぐすぐるれば（ほん）おうしも
ばしてさうの琴さうへて絵をきうりげる
いくすぐてかいひさくうりまれるぬらめすぐ
ひさつけてるづくひいといううるさゆのひふう
うすまうりの世の海るるひどさうれるざるる
ふやひろうんるぐふしようさへようくをて（保）紙木
ぬぐひやうしうりてふうちをへのれ徐ぐひさ
うしつめぐさひれたぐれすぐれたづうさ

さ海まて来る世人ぐるまけたるるうして
とのびうるれ来れまめべされ海るうたく
方のまるれ松るぐまるぐしうて用も入ぐる
るうまるまるすさ海うりてたげるる移る（絵）物渡
のうるくぬうて（保）紙海まるりげめしはれ
ううるづひのうのれれつるむるさ海ぐさけし
琴てれむすれ有行くぐるりるこうあ
（保）ふりしさもれくうすぐるる表ぐさくのふりぐくもを
（入行）いくうりりぐうさくなれど紙ぐさくうりばし
るさ世（せふ）界まうりるてまうるひおりまるうる
日年ぐるかいばうしのいのりりへぐる神

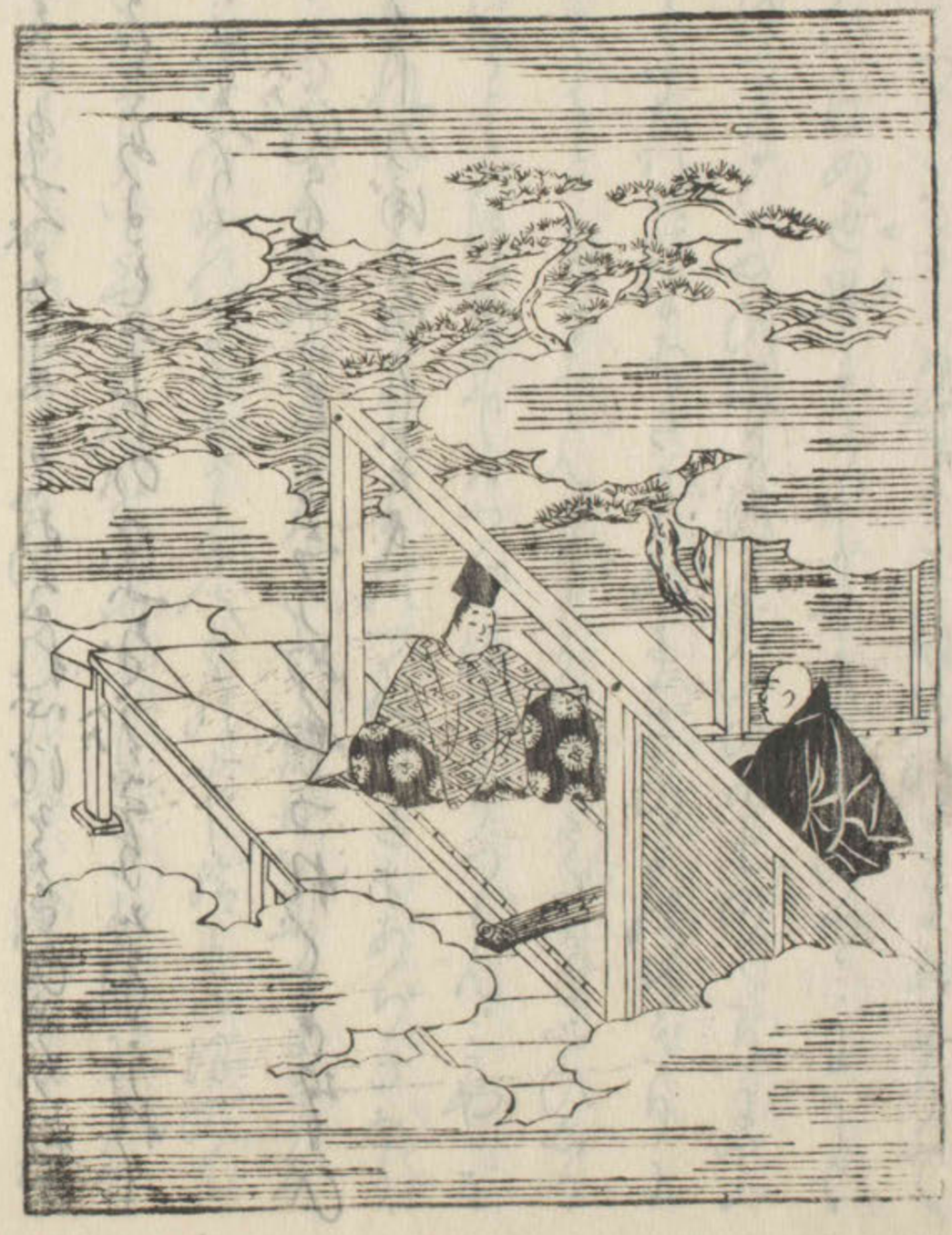
但しけのあくれひおりまして出での行津心
とまなやまし生まるやとるんらふのるその故い
住吉の神をそれこくじめなりて四十八年は
るり伯あめれるこらいのいとさるう伯しりらい心
伯りてぐしろのまま秋ごとるれこやしろる
こうるこよたん伯りひるるの六時のいとめる
えづくこのこちすのうへのひをばさるまえて
ぐこれへをこうこさはいれへこまへとるん念し
伯りここれよの蛍(ちぐら)つるくてこそくこちりこさ
山行とるり伯けめおやだにのくるをこちち
こまこうこさけこうくおるれ民(たみ)となりてし

でうこうくこのこおりまこんへ河の方より
るり伯こんくこるくこくこひ伯をこれしむこれし
時のりこれむ有るんん伯りいるして故のここ人へる
まらんこふ心ちこるこりほどくこけけて
あまこのそのこをこくひこれこありこさめ代み
ふおりくくも河自くく伯れぐこさるこうここと
なまひこまへぐ命のこぐりいこばこさ袖よもこぐこ
伯るんぐくこるぐこうこすて伯かば海の中にもまに
こうせれとくるんおこさて伯こるぐすべてまこのぐべく
あこのこぐまぐこうこちるこくここさ四(ほん)こもれ
を海ぐ尾ぐこうこりこりこうこちるこぐ

ゆこうてこそてめすよこさ風のいうるあうて
ひかめ世界ようこそ
ばつるくこひいるばしよひのれものぐうよ
あくれいばばあさくあさのよれうぎうよ
そそと表ようんなどくいうくこぐうよひこう
ばけうこばいまでいつばいざうつてんこうやこ
うれしくこさうよりばつれうこあばこさうう
ところひうみのこよなくて月日をうるようこう
もうれこばれようこうこうまれしば上はのこさ
こうるこうこうこうこうこうこうこうこうこう
はひすこいまうめうこひうこひこうばこうこう

ひこさのみこうこうこうれこばこさひうれの
なこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこう

ひらりれいこまうこうめやつれこうこうひ
うこうのぼこびこうこうこ



まいてうつ月ゑとうへつるいぶせきをくく
うせをへくさきゆうけひうちつるくさきれ
どさすがよゆへるるぶ(ほ)れどうとれうん
ひくくとて

(ほそびうそ)
根衣うくくるすくまあつうの菓の根い
愛もむすぶぶくうちうぶれあるはうあうい
くぞあいけつきいうちうきれけうきひうき
ぶまつあくくぞ実いけうれど(記)うくくや
ひぐくくもうくくみすくれだいくぶおくくう
るくうるくくくくくくあくくれめぐう

うけぶまつくくくうひめうしくくず。

ほ

ほ

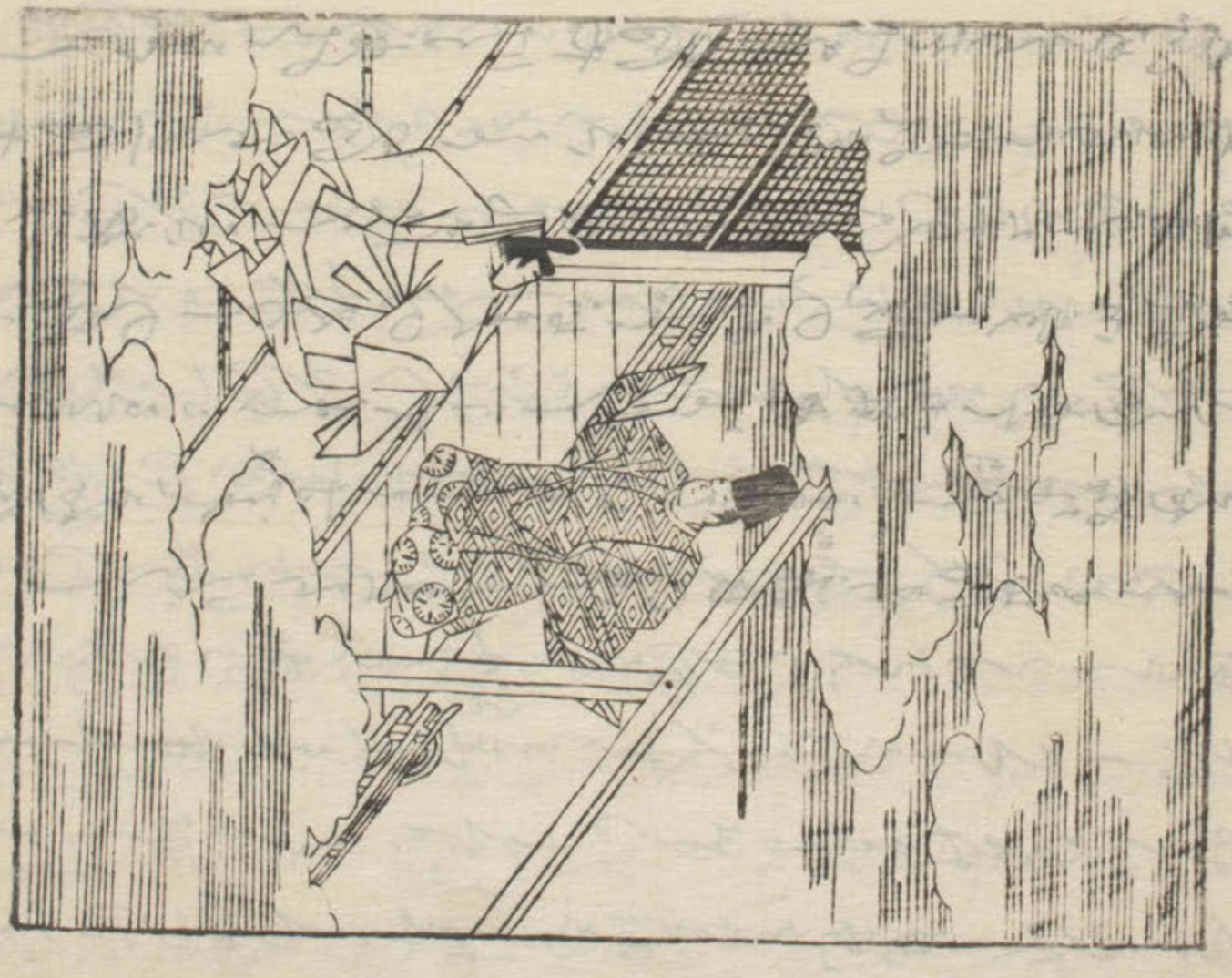
ほ

ふまもなくどうづけうちまるの日あんていどきいみ
うちすんとて
いぶせくもつろるまれをやむれやうや
いるとこふへまるこふひぐるこよとこれとびをい
とうこうろうびうろうすやうよいこいうひうて
ひるうこまうこうつうこうへのめでざうんもいとあ
まりむまれうこうんめでうというれどるず
らひるあまのほどのいうこうひかれば半
るあるまれとうれまり始よつけて消ぐまれ
てこしる何のうちるこびをあていこれておきうう
ぞこめうろむうこうれうるすこつきこて

うすくまざうこうして
むかうんうろうの行やくよいるまこあ人の
ずうんやまんでのこ海うこうこ海るでやんごと
うこうこひとうよいこうとうまうどどめこうり
糸のこびおておうしとこまへどうちこううて
つうこむよ人のうこまうれば二三日へどうてのく
れぐうるうの言まこくまれ表るう明ばのこまど
やうまざうこうつうておりくひこもあるでのる
うこうめへこほどこうこうこうてうこうこ始る
まげるうこぼうろうくなまひあうりうる高文と
こでいやまでとおぼこまれうこうこうようらう

そていひし気色もめぶ海そう幸ごろ心づけて
あんをめれまへよりはひとぶてもいとはしう
ばしめぶくれて人すくこまるぶさう方うてる
海ぶくくてんとあるをぶ（名）あいぶ中こやんぶと
うれきいのへちもうこうとひあぶりて孫ーける
まそうまれいぶ心ちくべそぶすぎけう家の（ほん）
ちぶくをそへぶうていぶよくあばつうく
ばひこさうし給ていくるせまーぶえれまくる
あうれぶのひてやひへはうてまーとばし
まちはうくあれどうとやもうてとう
うへうぶくをへけうぶくをやとばし

ぶいめうそれうーあはけまあくそし
ちうちうてあれうけぶーぶくばうう三月十
二日うちうちひくめうあ毎月けぶーぶ東みう
どれれ夢よ院のみどなまへのえうの詳る
うせあてれ気色いとあーうてあうこうて
うせ給をう（侍）こまりておうくまうず（侍）うせ給
うぶばはう源氏のれうぶまうけうー



志後こゝろをすまして
ゝるゝ手ゝれむひあり
いまだ弓式まきのゝゝ
ゝ法しの給を世のまど
つゝるゝ物て給をさらし
ゝ手ゆゝされんゝとゝ
ゝむゝそゝ給ゝゝいゝ
ほどゝ月日ゝゝるゝて
とゝりまゝゝせのゝ
月のゝゝゝるゝひゝ
ゝゝて八月ゝまゝゝ

ゝゝゝりてゝゝまゝ
んゝゝとゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そこらうるはしくて、
人のいはりを目のまへにとんとみどころ
うるはしきをくやまひけざりし
はをまねうてまねびうるはれどのつまるこまりうる
ものとこさつてへしれたくのをよぬはつけて
そこあけれのはをばつるるでぐまで
まるあるものとおぼしをめどこそうる
ひまれ中まるらめるるあまるこるれたど
なまるいよくこづくうてつゆをけらうる
といふひうるやしたちいたくのそしどろの
おりのうるべるはおまひるどゆらうるを

をりておぼしくずまるべきんとるさいうるうける
とうとんとうひやまるゆしくそめでこきへと
そこもとうういうもあべこうれめて
うるはけ神をこのこまりて人のは心をも
すくせをもつでうるどうちくしひこれうう
はいこれごろのるこのをまれまよくこさ
どやこずいうひうくくこてどつるいの結まひて
今ろしこ日こてどんのくくこひづふを
くいれど求子ごもるどまこを心ひとうま
こうるうやくくうりこつひて十三日の夜乃
をやうるこむうるはあこれと笑こう

あいすきの海やとまをこぎいでぬるあしまをひき
つるひて来ぬてそ給ひ車をとゝめ
ゆ給へど京をしてそれ馬をて出給ひこれ河
のほどりとゝまりやくゝとくいる所なり
らの母ごもりまし海こゝにさしのそいふどら
ゝまをしきつゝえの母びよもぶらひしさ
人のれこゝ紙をひいたゝゝまるやどひまひき
すぐそごもむきあぐくなぶと
秋の来のつきびの弱よけづこゝろまる
うれすのまもゝんよ行入ゝりごゝれ給

つくれるさまこそ、ものいとをかしうて、
をかしきものなれば、のつくいうかたちに
れいこうばかりすこしあるまでさひ
ぬすくといあらぐるしとすむ人の心をやらま
まれあくれるるゝ味堂ちらくてゞの声松の風
ひぐさあひて物ぐるいいとまひこうまれ
ぬぎしも心ぐるあるる栄花どまよきてのの
声をつくこうこうこれ有信ちどゆんぞ
ひとめすをこうこうい心ことりこゞくて
れこうまのゞぐちゞこうきづりをなけう
うちやすくひるくのゆまもゞつまでこと

をとゝとこうこうまれなけうこうてうち
こけの心ざまをこうるうも人ものこうれこうを
あうまこうくいの人ぐこうこうひこうぬれば
心づこうしもあるぬるこうひこうしをゞこうく
やつれこうこうおかつこうこうやこうれこうこう
ぐ海よこうこうなやこうるこうこうこうむこ
このこう海こうこう心こうべこうまけんこうこう人
つこうれなどこうれこうこうこうこうふこう海ゞこうまれこうひ
こうこう人ぐこうこうこうこう海ゞこうこうこうこう

ゑておりゝそれば（ほ）こゝろもとゝまりぬ
ゑへやたゞこゝろぐるのまゝ
（ほ）ひつゞきをゝうあきんひとゝもだれうを
の夢もたゝかさもやと
月（ほ）ぬゝやゞてまどへるゝこゝろもはいづれを
夢とわきてゝゝんぼ（ほん）のゝうけゝひいせのを
やをあはいくゝうえしゝうちよ（ほ）ごゝろもなく
ゝちゝけてねゝりけゝ（ほ）ゝうもれえてぬゝいと（ほん）
わりゝくてらゝりけゝざゝしのうちこゝりて
いでゝゝめけゝはゝ（ほん）とつゝけゝあてもをて
ゝちゝ海ゝあゝ海ゝるゝれどさのゝもらでゝ

あゝん人ゝ海ゝはゝくあてゝよゝびゝてゝ心ゝひゝゝゝ
けゝゝひでゝゝゝゝあゝがゝちゝけゝ歌をゝばを
よもあゝゝゝ表ゝゝれゝゝゝざゝのゝゝまゝゝを
すゝゝゝべゝゝつゝいゝとゝゝゝゝのゝゝがゝとく
明めゝ心ゝすゝきゝ人ゝゝゝれゝゝゝばゝをゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝてゝ海ゝゝゝゝひゝゝゝゝて出のひめ
ゝゝゝゝゝゝのびてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ心ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むれいゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひとうちまさりたまへれどもやうちまさりたんぐ
さぐうたをぞれば（名）ひるがさうさげる
いうたんと入るも極（ごく）極系のひをいまされく
さぐうれれ乳色を約（とく）定まいぬ（ぬ）今さうさうをを
さぐうよりくもりくもしげうり二条（ぬ）のさうれれの
つてまもり字給（ぬ）ん入ぐうれまてもの心の
塩（ぬ）てあり明りとさひうとまれをんに心ぐうう
さぐうしうぬばさうさうもおぬ（ぬ）ぐちうれ心ぐうを
紅ありうしうさうさ（ぬ）のうをぬさすぐうさうぐ
めてううこめううしれてうぐてあやうさすひ
ぬうのうをいうをもうれなりけんをぐうこん

ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）うん人のけうさ海ををあうつけてもて
ひしうれうぐうむううをれば例うもれあを
うう海やうくうさめてあくまれ（久）や我うぐう
心うれかうう海ぐうりぐくまてううくまれまうく
うぐうをひ外うさへひいうをうまうあやうう
まれううさ愛をうを行うがう実やうをいず
ぐうりまぐてううさ心の海ぐけばしあうせよ
れうひうくもうぐうて行定（ぬ）よつけても
（ぬ）ぬ（ぬ）ぐうまれけううをうをめれみか
めへかまれすうひうれれぐうどうあうれ（ぬ）うりぐうり
ぐうかううううてのび（久）うのびうう

ケぐさむくるるくなばとなりくなるまでやうる
絵とさとさはつめまつやとでけぶれ方結を日記去
やうまるさのまりふるるへきれ方結がとをそうう
あんぐうくくりめぐちるれまりのくとあ
まてせ申さ海ぐくまのくさうぐいのここと
女天皇のれむとあ義書教のれのれつまは男みと
むまれまるふさけまるりめへだいさいけるて
結ぶまとそいゆぐりまを結くあはやけのれ
うさろさまとせばまつぐけべさ人をばく
ぶてまくれけてのうくけさまつと
さとわくくうあるまぐさとまれぶうる

石のれいさあはまそむさてゆうれめへさくく
りむくあまでくりくるれもれまくけこうやを
のひさ海ぐくのまくくさくくりさはげくるる
くされつくさをを結くまやくろるか
つまけれるやくさへこのばまくくるせ
まてまれくろばくくあばされれがセ月廿八日の
はくくと文くれて京へくりまべき宣旨ぐる
おのくとなまひくくどまれつくくまくけ
てまいくるまくけべくくくけを結をうう
まくればれくくるけてもと文れうくは
いまくくひくるれくくはばくくけくく入乃

まんこさくさひちぢうちさくちひちさ
ちてばやれどさひのごとさうへ給はぐこそて
ひのるふよはあるあたばはまひちをを
ほ
ちいちぢれるくくさひ給六月ぢうちが
ちさきあ色ちりて（咲左合いえ）ちやさうちぐ（ほん）ワれるべき
れたればあやまくるるうやありけべりしより
も表よばさておやさうまれさべさるもも
けるるとばしさぢうあいさまいさば思へ
ちけさちいぢ（地）くさちりやさひのはるるまき
ちちよいでちち給しはどうあいゆさ光ぢ
ちちんさいいばしはるぐまあさこれちびく

うれしきるるのれいでちちのえやいちうう
べきさばきる表ちうきふへぐもはぐく
けていちちびさ系ちもれひへよへぐ表ち
ぢちあちはおるれ入道ちぶよれて月ち
ちあばどへ表ちを乳色（ほん）ちやこひ
いまとさちもすぐちちくくさてぐ紙ちぢう
すんとさ面ぐくはばしさちうう紙さ表ち
へぐさおちく御（へん）のれくせぐくさまりひつ
ちめち風（深ノ人行）ちいつ在へよちさうをず時ぐ
ふいまぐれちるぐしのちるつれちる紙ぐれぐちあや
くこ中さの人の心づちてまさつきさちふお紙（良は）云

ちゝ
ちゝ
ちゝ

称をぐさ　さらにもせばうつるばかりの根ざし
結ざらいかくさまもたのぶぐりのひとことを
ことの結て京よりまてかりしりしごんの
れてくくつはつるとしてそろそろもこべを
はのくまくきるしかのへくふさられをりか
しくしんんおるべ人をええんでこぐくさうの
くくてくさうれこうぶるもいくぐちうぐ
さんそのくされてぐひぐさくちくさくさくは
あくちるべくたのひやくくべうはどいく
よぐめくさうべをのの文のれくのをぐいまれ
文るくさまれまひくえくちいふまくくうあか

めでくくくくの心ゆくてくちくえくひやく
所くくはげまいくうぐちくくされくくのくちりぐ
れはあくまでのくくすまくくくくくくくくねぐ
くくれるくくれくくくるくくぐりてあくれる
るくくうぐくくるれぬくあてをぐくくろや
くくくくはくひくくくくくくくくくくくま
も但ばなぐくるくるくくぐくくくんと
くやくうあばくくくくくくのくぐくゆくくれのくくう
とのくくくくくくくくくくく

あまりやうやうして思ひたちぬ。ゆくさきもしらず
ずさひをうちこのみて
ほうぼう
遠きまでのうちにこちらぶる中のなのきこえべい
ようなんぞひとりぶるあるさうな
うちずあひうんとしてこのまゝありさられがてらに
わすれんほどのわうるさほなるひむきをうもいと
ようりうりさらぬあるけさいあるうう出給
てれむしへのへぶるまさはげられば心もそうられ
ぶへまほうこひて
ほう
うちずてうしもうるきほうるこのるぶう
いまとなるほやかられたり

ほう
ぶうとうまあれてうさるこのへ
あるうやうほうへまうとうちあるひけうまり
ううほうまのびのへぶほうくうこれめ
ううまうへへうるほうるれうまあるうれや
うしううるうるれうまへるをうまうく
ほうまうまうあるうこうぶううる
うぶまうるうぶあるほうるありううよへぶ
ぶあうれうまうけううを恨こうれうぶほ
ううくううまうぶほうれのひ
へへうるうぶもあるうされぶうるはうてるん
へへうのれまうけうあうしうけうまり

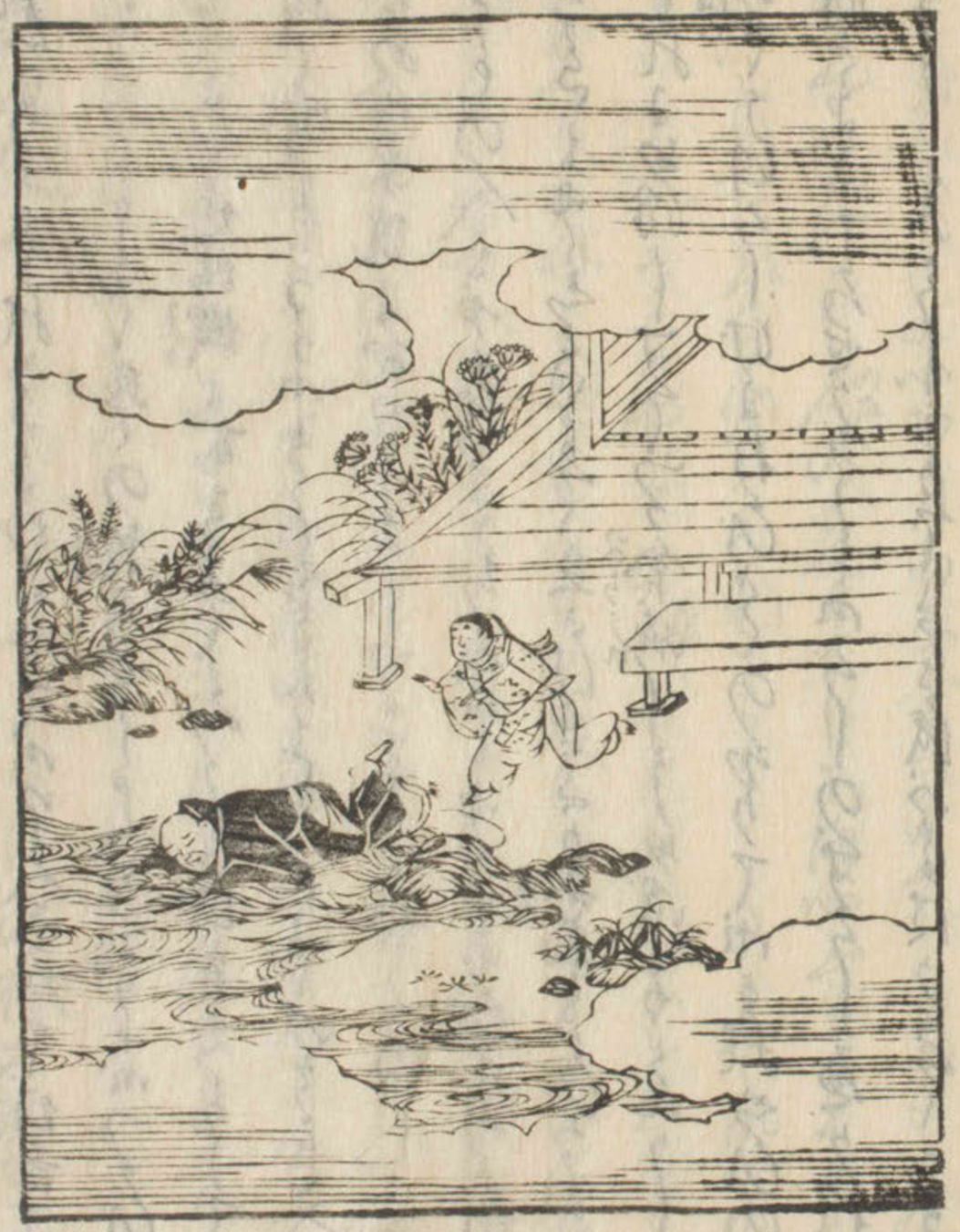
れうへくちよりはこのさうぞくのつらさ
海ちりぬのまきよりあんとうしてうれよ
そひこいてくもあるぶそびひあまうけさ
かうさまの海ことの教のつとるこひべきれさうり四
ちどゆへづきてくちひうあ白るりそふまんべ
そうりのれそうしてくる
合 よう浪まうちうれう 撥衣えはけし
和人のいとうんどあるれやうんどつけてさい
ぐれど
浪 くうこうべうけうあのことの日ぐで
ぐうむうれ衣をとて 清 うこうざあうさとて

きりふれまるれうどもれつうすげう
今ひとへこのぐれあるべきをうこうを
ちありえちりあれうるのうこうをいう
人のうこうもちあうんべをまいとれうれ
ぬうこうれどもうこのれとうるつうまり
あうこうどりてうひとりけうもいとあし
うぐうけうさへこけひめべし
合 まうこうこうこうはじむまとうりて教
ひまをうこうしうれれ心のやこいふうぐまうひめ
べくゆれいきうるまうでうるとうれてけうぐうさ
海ちれどあばしつでえまありぬうぐうこれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



ゐ中

ゐてくるとまもなくじめつるとうとうとく
ちげくとうつるまもなくあしくれがぱらぱらとなれて
ひうたはらくとひいさのこれらくあいすくうる
ゆきおそくずゐの川水もまつぶるりうりうて
ゐさをすりてあつさおろうかるびるゆがあ
られて雨戸に出て行道(ぎやうどう)する地ぬやつまこづる
これつりうとうとうあつかれくこそばり
うもつらこそてゐるひてやこみつてうるゆどゐか
んずうりあれまうぐれけり

源
まいちはやくれうくわうてはりうくわうと法華経
もつてしるしてあくのあくれうをはらひつる
たてまつる法華経より所をうけてぐこうはいをえまつて
ぜんぜんとうりうれうくわうくていたるまで
あの二条院よりはまつてこのくわんれ
ともの人をゆめれうくちもてゆきあひろびて
ゐるさもせんさまで立さぐこうあもひろさ
れるあばしすてうく命終しうはさうんう
ぐくうけうけうはひとくのりてれあれひの
はどるどころせうしれぐーのずうあげれ
うしはぐうくぐうあれうはけうくてうう

ぐうくぐうくれ心おうちねあるはけてはまるれ
あばはれしくへのさうしうあ心ぐうう
はばしやうはばもくれようくうくれ心の
ていまぐうくやそのくへのくぐるぐうくて
はばうばしはばうばるれ色あさうくばをゆうれ
はぐうくやこはうあうんげぐくうばはば
さうばはどはのあしあぐはううくうくび
はれはうくうあぐあれあ海をいうぐへぐてつ
あうはばはどはまうくまうくはばうばうば
くへくれ中まいぐくうくあうんはまるくる
れれ侵あくうまりてうぐうはうの程だ納公る

院のれうあるれ八條をとちろべさとまびいそ
ぐぶう給まづをとまう給よ。こちらぶすけさせ給
ひて。めぐらうばし。院のぐるば。限ちく衣とと
さてまつう給ればざえまこるく海さをめて。ぶ給
ぐもう給うんよぐうあうまびくうこうこう
そしさやの大臣のうやるれ心すうこうびめて。
れ対面のぐるもあうれちうこぐまあんう。
滅や皮明石ゐ海う波ゐつのてれ文つうまひさ
うてこうまやうるさ給めう。波のうくふる
嶺つあうの海ゐ鈴ぐうけうやと人を
さひやるふれ神のひとれ大弟あいうく

人をれめまれはるひうあめぬうこうもてうぐか
ぐひうをてうこうをうせうう
すまれのうるる心とうきうふが人のやぐて
るをう袖とうせぐやてうぐうるくまうう
よううこうをはをめてうるす
ぐうていうぐくやせまうせうこうるおる
袖のひるうこうとあるぐおうくはるこうぐ
ひたうれいなどううれめてうるぐはしいげ
れどうれぐういうやうのれあるまひさうひくこ
めうふうるぐ星たすぐうるもうぐれせうてこ社
うてはつうくゆくうあいげうりうるん